

樹木の中には成長の過程で一切、節を作ることなくグングン成長していく種があるそうです。しかし最後には大きくなりすぎて、自分の自重に耐え切れず、突然ポキンと音をたてて折れてしまうのだそうです。節は建設資材としては不要なものだとされがちですが、樹木の成長には欠かせないものなのです。

さて、長渕剛の『とんぼ』で始まるテクアの新年会も無事、大盛況のもとに終わることが出来ました。常に安全、安全でピリピリしている組織はどこかで『大息』を抜いておかなければいけないという大義名分のもと、どこまで盛り上げることができるか限界に挑戦しているわけですが、さすがに毎年毎年のことですのでダンダンねたが切れてきてしまい、いまいち盛り上がり欠けてくる時間帯が出来てしまいます。ところがそういう時には必ず救世主が現れるものなのです。

これを『自己犠牲・男の世界の法則』といひまして、盛り上げよう盛り上げようと孤軍奮闘している哀れな幹事の姿を見るに耐えかね、深〜く深呼吸を一つし、ビールを飲み干し、コンパニオンさんに一礼し、おもむろにすくっと立ち上がり、黄色いアヒルさんの着ぐるみを着、あるいは自前の黒いパンツを脱ぎ捨て、網タイツをはいて舞台に玉砕覚悟で登っていく男達の勇士の姿を言います。

冷めた目で見れば誠にばかばかしい行為かもしれませんが、私には一生、瞼の裏に残る勇者の姿にみえました。

『納豆入りのジャムパンが食いてえ、すぐ買ってこい！』

国立大分大学の学生寮で真夜中、先輩の理不尽な命令を直立不動で聞き、0.3秒以内にハイと返事をして外に駆け出す。コンビニにそんなものは売っていないと分っていても駆け出す。そのような地獄の寮生活を通して徹底的に自我を押さえつけられ、鍛え上げられた男の精神の『節』は非常に太く、ややもすれば、理不尽な扱いを受けたと些細なことで自己主張し不満を漏らす現代の若者気質とは一線を画す瞳の輝きを持つ。

そんな男が今回狙っていたのは、勇者たちが疲れ果てた後の2次会会場だった。2次会会場に作為的無表情のYバック姿で登場した彼の姿を見て誰もが『やられた！』『プロだ！』『男だ！』と唸った。

自己犠牲のギの字もなく、早々と布団を敷いて寝ている面々の顔の上にYバック姿で次々に腰掛けることによって、皆恐怖で悲鳴を上げて飛び起きる様は今でも鮮明に瞼に焼き付いている。

『組織における自己犠牲』、それは人それぞれで見せ場は違うかもしれないが、ここぞと言う時に、みんなのために一肌脱げる力をためている場所が、本当に苦労した時に出来るであろう『心の節』にあるのではないかと思う。今月の私の師はテクア社員濱崎君です。

【羽原 篤史】

